

企業における生物多様性対応の特徴と課題 —気候変動との関係性を中心に—

深野 祐也

目 次

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 6. 局所的な課題の集合である |
| 2. 生物多様性と企業は対立していた | 7. ビジネスとの接点が多岐にわたる |
| 3. 脱炭素の「次」だが、脱炭素の「隣」ではない | 8. 愛がすごい |
| 4. 測定が困難である | 9. 脱炭素とのトレードオフとシナジー |
| 5. 単一の指標がない | 10. 結論と将来の展望 |

近年、生物多様性は企業の重要課題として注目され、情報開示を含め様々な取り組みが進んでいる。本稿では、気候変動対応と対応させる形で、生物多様性の測定の困難性や指標の多様性、局所的課題の集合体としての特徴を解説する。さらに、気候変動対策とのトレードオフやシナジーを整理し、企業が取るべき統合的アプローチの必要性を強調する。

1. はじめに

近年、企業におけるサステナビリティ課題として、生物多様性への取り組みの重要性が高まっている。その背景には、地球規模で進行する生物多様性の喪失が社会や経済活動に深刻な影響を与え、持続的な成長を阻害するという認識が広がったことがある。この状況を受け、企業は、研究者や関連組織と連携し、自然への依存と影響・リス

クと機会の評価、サプライチェーン全体の環境負荷低減、持続可能な資源調達といった具体的な取り組みを進めている。

生物多様性への取り組みに関わる国際的な枠組みは、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）を参考にしたIPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学—政策プラットフォーム）、TCFD（気候関連財務情報開示タスクフォース）の枠組みを採用したTNFD（自然関連財務情



深野 祐也（ふかの ゆうや）

国立大学法人千葉大学園芸学研究院准教授。専門は生態学。2008年東京農工大学卒。2013年九州大学大学院システム生命科学研究科博士後期課程修了。九州大学大学院理学研究院、日本学術振興会特別研究員博士学位取得者。東京農工大学農学研究院、東京大学大学院農学生命科学研究助教を経て、2022年より現職。著書に『遺伝子・多様性・循環の科学—生態学の領域融合へ』（京都大学学術出版会、分担執筆、2019年）など。共訳書に『グローバル変動生物学—急速に変化する地球環境と生命』（エリカ B. ローゼンブラム著、朝倉書店、2024年）。